

後藤清子（以下、後藤） 泰生ビルの5階に保育所のピクニックナーサリーを開所したのと同じころ、同ビルの2階にピクニックスクールという学童のような場をオープンしました。ここでは子どもたちになんらかのコンテンツを提供していたのですが、その後、泰生ポーチ1階に移ってピクニックスクールを展開してみると、なにもしなくても場がもつような独特の感覚がありました。

以前、ジャック&ベティで『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』が上映され、岡本さんのトークイベントを聞きました。それを機に、図書館の可能性を考えるようになり、岡本さんともよくお話するようになったのですが、この「なにもなくてもいい空間」の必要性に意気投合して。図書館には本があるのが、子どもがなにもなくても居やすくなります。ピクニックスクールと図書館を掛け合わせ、



伊藤 僕たちの力ではなくて、入居
水谷 入退去は常にあることで止め
られないので。ただ、こういう流れ
を継続できるのが一番いいことす
ね。

編集部 間内では「オンデザインイ
ツカイ」の存在感が強まっており
そのほかにも、まちのキーパーソン
になるような方が現れています。

伊藤 コロナ禍や能登の震災、戦争など、2〜3年先のことも見逃せない世の中です。だから今は目の前のことをクリアしていくしかありません。現在は、空室になっている部屋をもっとクリエイターの方によりよく使ってもらえる発信を考えないといけないですね。

水谷 今は経済や株価の高騰が加熱していますよね。ただ、もっと小さな企業や個人が実感する経済状況がよくなるってほしいと願っています。つまり、コッソコやっていくしかないですね。

NEW! 新入

株式会社
CES. 緑研究所

トキワビル



社名は「Culture」、「Environment」、「Space」の頭文字。ランドスケープアーキテクトとして、「2027年国際園芸博覧会」の開催の盛り上げに取り組む。

関内から考える

き手・執筆：及位友美(voids)

「図書館」と「子育て」。それぞれの専門性から関内における「子どもの居場所づくり」について議論を重ねてきたお二人と、泰有社の鼎談企画。熱い対話は、東京でも横浜でもなく“関内”というマイクロコミュニティならではの「これからの経済圏」へと展開しました。その一部をお楽しみください！

もうすこしポピュラーなかたちで、関内のちょっとしたスペースで展開してみたいねと対話してきました。

岡本真(以下、岡本) 自分自身の子ども時代は、両親が共働きだったので、地域社会のご近所づきあいのなかで育てられたんです。実家は金沢区の新興住宅地でしたが、祖父が緊急入院したら、裏の小林さんにあずかってもらうといった関係性が、50年前でもありました。こういった支え合いのような仕組みで、現代の社会で考えられないか。私には子どもがいませんが、今は子どもを知らない選択をする夫婦も多い。そういった人たちが、コミュニティに関わる仕組みづくりに関心がありました。

子育てを支える場をつくることは大事です。かといって、公金や税金に期待することには現実味が無いとも思っています。今の時代ならではの経済圏をどうつくっていくのか、考えていく必要がありますね。

もうひとつ、子どもにとって大事なのが、意思決定をさせること。これは若い世代についても同じです。20代のころはYahoo!で仕事をしていたが、孫正義さんは20代の若者に権限をもたせて、好き勝手にやらせてくれました。めんどくさい心配がいないのは、事業がうまくいく一番の理由なんです。「世の中は」

と言って止めるやつがない。そこがブレイクスルーをつくるんです。日本各地で仕事をしていますが、横浜のいろんな地域を見ていて「いいねえ、歴史のない街って」と思います。

伊藤康文 (以下、伊藤) 泰有社は弘明寺のGM2ビルで「ニューヤンキーノタムロバ」というシェアハウスを、YADOKARIさんと一緒に運営しています。入居は1年間限定。年度末に集大成の「ゼロフェス」という卒業展示で、1年のクリエイティビティの成果を発表するのですが、やはり20代の力を感じるんです。僕たち



50代は、僕たちのカルチャーをつくってきましたが、20代がつくるカルチャーには絶対に口出しちゃいけないなって。タムロバでは、彼らが自由にできる土壌をつくるのが仕事だなと、つくづく思いますね。

泰生ポーチの1階は、これまで飲食の人たちや、共同事業体のようなかたちで運営してきましたが、いまだ使い方は模索中です。お二人が考えているような「子どもの居場所づく



オーナーが
2023年度のできごとを
振り返ります！

者の力が大きかったんですね。ただ、スタートアップ企業やフリーランスの方に向けて、いかに間口を開けておくかは長年もち続けているテーマです。不動産の慣習をとっぱらって皆さんの活動を広げられたらと思っています。

編集部 最近各エリアで若手世代も頑張っていますね。

伊藤 一般社団法人からこそBOXや「さくらWORKS(関内)」、「ニューヤンキーノタムロバ」などの若い子たちには、僕たち世代とは違う視点があります。今の人たちのカルチャーを生み出してほしい。世代交代していくことも必要ですね。

さまざまなスペシャリティをもつ人たちをご紹介！
シリーズとして、随時ウェブに掲載予定

全文はWEBで

写真：大野隆介

コービル Stamina シンコービル
Art Company



横浜のアートシーンで知り合った二人が代表。
自分で企画したり考えたり、実行したりする
人たちが定期的集える場所。

「これからの経済圏」

り」を、ここから発想していただく可能性もあるかもしれませんね。

後藤 この一年半ぐらいで、創造都市のシンポジウムにいくつか出演しましたが、泰有さんの貢献は半端ないんだということをあらためて感じたんです。4つのビルにクリエイターが集積しているので、規模感のあるコミュニティが形成されている。私たちピクニックルームは、そこに保育という福祉的な要素を担保しているので、クリエイターご夫妻が家族ぐるみでコミュニティに関わるようにもなりました。コミュニティそのものが、かなり熟成してきている。そろそろ意図的になにかを仕掛けていく段階に差し掛かっているかもしれません。

泰生ポーチの1階は、じつは地域のシニアクラブのレクリエーション会や、関内まちづくり振興会、町内会、商店会などの集まりにも使われているし、子ども食堂もやっているので、街の中になくってはならない場になっています。一方で、若い世代の人たちも、この場所や関内さくら通りを自由に使いはじめている状況もあるんです。泰生ビルを牽引するオンデザインパートナーズの若手や、さくらWORKS(関内)の姜美宇さん、一般社団法人からこそBOXの瀬脇信さんなどが、自主的にイベントをひらくようになっている。今まで私がやっていた道路占有許可の申請なども、若手が進めているんですよ。そういう動きは大切にして、一緒に盛り上げていきたいですね。

岡本 スタートアップが一大ブーム化している
東京との違いを、もっと意識してもいいと思う

んです。このほどほどにぬるいと言えばぬるいスピード感も、横浜ならではだとも言える。横浜独自の経済圏を考えていったほうがいい。

たとえば最近、オンデザインの若い人たちと一緒に仕事をすることが多いですが、多少ウザがられたとしても、自分の経験や技術を投資として、伝えていくように心がけています。このようにして地域の若い人たちの才能の発掘に関わっていき、後々の自分の居場所を考えたとき、縁の薄い親戚よりも大きな担保になるかもしれないと思っています。

伊藤 本当にそうですね。偉そうに教えるのではなくて、僕も自分が生きてきた過程を若い人たちに話す機会が増えています。共感してくれる若者もいて、今では弘明寺のお父さんと言われたりもして(笑)。

家賃が抑えられたり、リノベがしやすかったりといったことをきっかけに、クリエイターやアーティスト、若い世代の人たちとご縁があって。こんなに交流の機会があるオーナー会社はなかなかないと思うんですけど、自分が好きだからやっているし、仲間に入れてもらっているような感覚があります。

岡本 このコミュニティに「金融」をかませたいんですね。やはり地方経済においては、地域金融機関、特に信金の力が大きい。関内エリアには、小口の再投資モデルをつくることが求められているんじゃないかと思っています。たとえば老後は2,000万円の貯蓄が必要だと言われる時代ですが、ほんとうに必要なんでしょうか。この先使われることのないムダ金にすることなく、マイクロキャッシュの流れをち

やんとすることが必要だと思っていて。
今の時代、年金が返ってくる保証もない。に預けるより、地域に投資しようという考えはそもそも合理的だと思うんです。

後藤 おもしろいですね。泰生ポーチ1階の
用について「アイデアソン」を開催して、優
なアイデアを出した人には家賃を免除する
画もいいですね。

伊藤 「横浜」という単位で考えると大きすぎず、経済圏のイメージがわからないのですが、「関村」みたいな感じで考えてみると、細分化された経済圏としてもイメージがもちやすくなりますね。

後藤 「セントラル関内」という言い方がありますが、「マイクロ関内」のほうがしっくりくるんですよね。少子高齢化で先行きが見えないなか、ここ関内では、市や公共が仕掛けたいことを超えて、コミュニティがちゃんと自分たちでしている。生きていきやすい、わくわくできる日常があるっていうことを、もっと発信していきたいでしょう！



TAIYUSHA
NEWS

街の未来を考える
<https://taiyusha.co.jp/>

泰有通信

vol. / 07
2023, Spring - Winter

私たちは不動産事業をとおして、「コミュニティをはぐくむまちづくり」に取り組んできました。泰有通信では入居アーテクト・クリエイターの活動を紹介しています。

2023年度は入退きの動きが大きくあった1年となりました。そして、コロナ禍でやや下火となった入居者同士の交流を活性化するために、あらためて泰有社物件の入居者を一挙にご紹介します。また、新入居者の日々の仕事にフォーカスする紙面もあわせてご覧いただけます。

そのほかにも、泰生ビルのキーパーソンである岡本真さん(アカデミック・リソース・ガイド株式会社)と後藤清子さん(株式会社ビクニックルーム)、そして泰有社による、関内エリアのコミュニティを考える特別鼎談も収録。独自の経済圏「マイクロ関内」をつくるアイデアと対話が生まれました。

また、泰有社の「Threads(スレッド)」公式アカウント(@tayusha)を2024年1月に開設しました。これからも各拠点や入居者のニーズをお届けしていきますので、ぜひご期待ください！

泰有社の入居者、一挙紹介！

集合写真：大野隆介

泰生ポーチ

303 加山

302 株式会社 横浜アストリア

301 三浦佑介

300 佐藤恵美

299 中村ひろ

298 アートディレクター デザイナー

297 有限会社 月道 月森忍

296 リノベーション、リフォーム

295 株式会社BRAIST

294 TDLアーキテクツ+上野正也

293 NPO法人ハマのトウダイ、(株)アップテラス

292 SITE BAY YOKOHAMA

291 株式会社 横浜アストリア

290 株式会社 横浜アストリア

289 株式会社 横浜アストリア

288 株式会社 横浜アストリア

287 株式会社 横浜アストリア

286 株式会社 横浜アストリア

「small is better!」がコンセプト。
フリーランスやスタートアップ企業が個性的な活動を展開中。

隔月で共有部屋の311号室に「住民会」で集合！
新たな化学反応が生まれています。

入居者、

関内エリアに4棟、
弘明寺エリアに3棟のビルを所有し、
多様な人たちが
さまざまな目的で使える空間を提供する泰有社。
1966年の創業以来、「まちの大家」として、
「人が主役」の不動産オーナー業を目指してきました。
今号では全ビルの入居者の皆さまをご紹介します。

ビルが活ければまちが活きる。
関内エリアのまちづくりのキーパーソンが集まります。

506 自在関内オフィス/アトスペース「と」 関内
シェアオフィス、まちづくり、アート、デザインほか
一般社団法人からこそBOX
まちづくり、アート、デザイン、香香支援ほか

関内 泰生ビル



現代美術家のスタジオや、クリエイターのシェアハウスも。
古き良き弘明寺に新しいカルチャーをもたらします。



GM2ビル



キーワードは「シェア」と「世代交代」。
新しい生活スタイルの発信拠点になっています。

水谷ビル



関内 トキワビル

シンコービル

GMビル

水谷ビル

GMビル

GMビル

GMビル

GMビル

GMビル

GMビル